

[編集後記]

◇ 内部, 室内, 奥地, 内地, 内政, 内心等の意味をもつインテリア interior という言葉が, インテリア・デザインという用い方で建築の領域で正統の位置を占めるようになったのはごく最近のことで, これは内部設計技術が単なる装飾に終るものではなく, 環境の中で機能を発揮しうるものを作ることに, より重きを置かれるようになった結果であるということです。

◇ 編集委員会は昨年12月末に約1/3の委員の入れかえを行ない, 47巻の編集へ向けて仕事を始めました。47巻の刊行計画はこの新しい委員会で練られたもので, これを次号(46巻6号)に発表する予定です。その委員氏名は47巻1号から掲載されます。またこの委員会で上記のような意味あいでの本誌のインテリア・デザインについても検討が行なわれましたが, その結果についてここでお知らせし, 47巻1号からはその形をとっていただくようご協力願うことになりました。

◇ たとえば論文の標題や所属の書き方, 脚注の扱い等については, いままでは著者の書かれたままを載せていましたので, 雑誌にした場合まちまちでありましたが, これを統一することとし, とりまとめて投稿の手引補遺(2)としました。従来の投稿規程, 投稿の手引, 同補遺とともに, 論文作成あるいは論文作成指導の際の参考にしていただきたいと思います。

◇ また図表の書き方については投稿の手引にも書かれてありますが, 図表中の文字の大きさや, 線の太さなどが, 本文とのバランスを失なうとかなり見にくくなります。このことについては一読者からのご指摘もあった程です。投稿の手引中の記載がわかり難い点があるかとも思われますので, この際改めて本号547頁のようにしてみました。ご一覧の上, 投稿の場合なるべくこれに添うようにして下さい。

◇ インテリア・デザインも大切ですが, もちろん本誌として最も重要なのはその内容です。本号は原著が梶

本, 丸山両氏の2篇のみで, 4号よりさらに少くはなりましたが, 巻頭, 総説, 講座と揃って充実していると思います。綿貫先生の巻頭は本誌の性格をよくつかんでおられ, また医療の現状にも目の行き届いたもので, 心身ともに動脈硬化にだけは陥りたくないと感じておられます。

小松崎先生の総説, 加藤先生の講座とともに, アンケートによる会員からの推せんによりお願いしたのですが, それぞれにその道での造詣の深さを示され, 見事にまとめられてあって, 非専門のものが読んでも実に興味深く, 同僚の方々にはさぞかしご参考になるものと思います。両先生に感謝するとともに, ご推せん下さった方に有難く御礼申し上げ, 今後とも会員の方々のご推せんをお願いする次第です。

◇ あたらしい薬は続々と登場してきます。現在数多くの薬剤がある上に, きびしい審査を経て新しい薬物として用いられるようになるのには, かなりの特長をもったものでなければならぬわけで, 今回の麻生先生のアマンタジン, 村山先生のヨウ化シクロニウムにも, その点が明らかにされています。

アマンタジンは抗ウィルス薬としてインフルエンザに用いられるようですが, 附記にあるように抗パーキンソニズムの作用もあるらしく, 興味がもてます。ヨウ化シクロニウムは構造的にはアトロピンに似ていないが, 作用はアトロピン様であるところが目を引き, アトロピンの副作用の面から考えて, いつかは出て来なければならなかった薬のような気がします。

◇ 診療のための検査は, 前回に引き続いてビリルビンの検査ですが, ことに非特異的反応についての注意の項は, 経験に基づいた適切な示唆であると思えます。なお降矢先生の担当は一応次号までで, しばらくお休みいただき, 47巻からは細菌学的検査の方に移っていただく予定です。あわせてご期待下さい。(萩原彌四郎)